鹿児島大学総合研究博物館研究報告　No.8

大隅大崎 神領 10 号墳の研究　I

鹿児島大学総合研究博物館

2015

目次

1　調査目的 …… 01
2　古墳の立地と調査経過 …… 01
3　墳丘 …… 05
4　墳頂部埋葬施設と副葬品 …… 07
5　クビレ部と祭祀土器群 …… 16
6　前方部西側面と盾持人埴輪 …… 27
7　地下式横穴墓 …… 31
8　まとめ …… 32
付　調査風景 …… 36

例言

1　本書は鹿児島県曽於郡大崎町神領10号墳において実施した学術調査の概要を報告するものである。

2　発掘調査は鹿児島大学総合研究博物館 准教授 橋本達也を研究代表者とする科学研究費補助金若手研究 A「前方後円墳築造周縁域における境界領域の構造に関する研究」を用いて実施した。

3　発掘調査は橋本を調査主体者とし、大崎町教育委員会の協力を得て実施した。調査には青山学院大学・明治大学・早稲田大学・京都大学・大阪大谷大学・岡山大学・愛媛大学・高知大学・福岡大学・熊本大学・鹿児島大学から大学院生・学生の参加があった。整理作業には大阪大学大学院生・学生の参加があった。
また、調査において塚本敏夫（(公財) 元興寺文化財研究所)、東憲章（宮崎県立西都原考古博物館）の協力を得た。埴輪のX線CT撮影には鳥越俊行（2009年当時・九州国立博物館）の協力を得た。

4　各次の調査期間は下記のとおりである。
第1次調査：2006. 08.17 ～ 09.09
第2次調査：2007. 08.17 ～ 10.05
第3次調査：2008. 08.18 ～ 10.18
第4次調査：2010. 08.25 ～ 09.03

5　本書は橋本が編集・執筆した。

6　本書は2015年度までの整理に基づく調査概要を提示するものである。今後、より詳細な情報を順次報告する予定である。

1　調査目的

鹿児島県大隅地域、肝属平野周辺域は最南端の前方後円墳が築造された古墳分布の南限域である。この地域には、唐仁大塚古墳や横瀬古墳といった大型前方後円墳から、中小の円墳、地下式横穴墓など数多くの古墳墓が築造されている。

古墳時代は汎日本列島的な地域統合の進められた時代であるが、従来、各地域の古墳築造動向は近畿中央政権との比較的単純な政治関係において説明されることが多かった。しかし、古墳時代社会の多様な側面が認識されつつある今日、地域の側の資料から積み上げた古墳時代史像の提示に取り組む必要があることは言うまでもない。とくに、古墳築造地域とともに非築造地域も広くみられ、また地下式横穴墓・板石積石棺墓・土壙墓などの多様な墓制が存在し、南の琉球列島の島嶼文化とも対峙する九州南部は、東北地方などとともに古墳分布の境界域として古墳という存在の本質を探る上での重要なフィールドである。

しかしながら、この地域の古墳研究は従来、活発であったとは言い難い。とくに、九州南部の古墳時代像は文献史上の異民族「熊襲・隼人」に結びつけた説明に終始する研究が長く支配的であった。しかし、それは7世紀後葉以降の古代国家の支配理念を考古資料に踏み返したものに過ぎず、今日では超克すべき姿勢である。その上でそれに替わる地域史像の提示が求められている。

あらためて古墳を造る社会とそれを必要としない社会が共存する九州南部の古墳時代研究は、日本列島における社会共通圏の拡大、広域交流と地域間関係、民族意識の形成という古代国家形成過程にかかわる課題の解明に迫りうる大きな役割を担っているといえるだろう。

このような問題意識にたち、橋本は南の境界領域における古墳時代社会の構造を考古学研究によって明らかにすることを企画した。具体的には2002年から2004年まで大隅地域の鹿屋市岡崎古墳群において円墳と地下式横穴墓の調査を行い、つづいて2005年に薩摩地域の南さつま市奥山古墳の発掘調査を実施した。また、鉄製品を中心とする副葬品の研究も進めてきた。その上でさらに、この地域における本格的な前方後円墳の発掘調査資料が存在しない状況をかんがみて、2006年度からは曽於郡大崎町において神領10号墳の発掘調査を計画した。本書はその神領10号墳で実施した調査の概要を著したものである。

2　古墳の立地と調査経過

(1)　神領古墳群

鹿児島県曽於郡大崎町神領・横瀬に所在する神領古墳群は、現状で前方後円墳4基、円墳9基、地下式横穴墓8基以上が確認されている。10号墳は古墳群中最大の前方後円墳であり、「鈬亀岡」の別名がある。また昭和26年に作成された「鹿児島県遺跡地地名表」（三友国五郎1952『鹿児島県考古学会誌』第1号、鹿児島県考古学会）によると、昭和24年5月に駒井和愛・斎藤忠「発掘」と記されている。しかし、その内容についてはまったく知られていない。この年、東京大学文学部考古学研究室に鹿児島県から委託された調査の一環として行われたとみられる。なお、この古墳は中世には大崎城の一角であった可能性があり、また戦中は軍の陣地として利用された。

前方後円墳の6号墳（別名：天子ヶ丘古墳）は昭和43年に発掘調査が行われた後に破壊されている。残念ながら調査記録の報告がなされていないので、詳細な状況が不明であるが、墳丘長48m、埋葬施設は花崗岩製箱式石棺で内法2m、内面は赤彩されていた。北頭位で倣製獣帯鏡の副葬が確認されている。鏡は古墳時代中期前半に位置づけられる。

地下式横穴墓はいずれも偶然発見されたものであるが、1号地下式横穴墓（別名：竜相あるいは

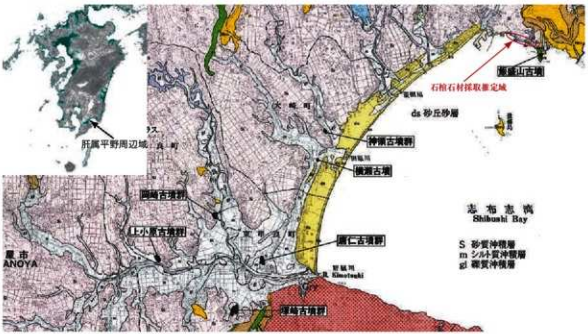


図１　肝属平野周辺域と神領古墳群の位置

図２　上空からみた横瀬古墳と神領古墳群（南から北）

天子の前地下式横穴墓）、は、妻入りで切妻家形玄室に軽石石棺を備え、鉄刀、倣製内行花文鏡、イモガイ製貝釧２が副葬されていた。ほか５号地下式横穴墓でも妻入り家形玄室からイモガイ製貝釧が出土している。3・4号地下式横穴墓は平入り玄室で遺物はなく、6号地下式横穴墓は平入りで人骨片のみ､8号地下式横穴墓は妻入りで遺物はなかった。1号地下式横穴墓以外には際立った規模・構造・副葬品をもつものはない。

近在する横瀬古墳は墳丘長約 140 m の大型前方後円墳で、古砂丘の微高地上に存在する。周溝、周庭帯を巡らせ、南北は微高地から切り離すため部分的に二重周溝がある。加耶系の陶質土器ないし須恵器、TK216 型式の須恵器甕口縁部、窖窯焼成の埴輪が確認されている。九州で第５位の墳

丘規模をもち、TK216型式段階では九州第1位、西日本でも岡山県作山古墳に次ぐ第2位の規模である。本書で明らかにするように、神領10号墳は横瀬古墳と同時期の古墳であり、同じ工房の埴輪を共有しており、きわめて近しい関係がうかがえる。横瀬古墳は単独墳であり、もっとも近い首長墓系譜が神領古墳群であることからも両者の関係性には注目できる。

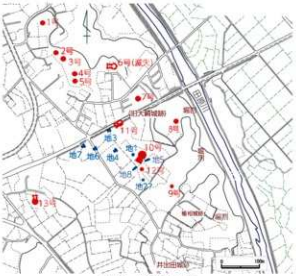


図3　神領古墳群

図4　上空からみた神領古墳群と志布志湾・くにの松原（北西から南東）

(2)　調査に至る経緯

神領古墳群は肝属平野周辺域における主要古墳群の一つでありながら、その実像に関する情報は少なく、古墳群の評価は不明確なままであった。一帯は一部が住宅地に取り込まれているが、農地や山林化しているところが多く、学術調査以外に情報が明らかになる可能性も少ない。そこで、2006年度から科学研究費補助金の採択を得たことに伴い、この古墳群の一端を明らかにするために発掘調査を計画した。

調査以前、10号墳は確実な情報がなく、年代的な位置付けも不明であったが、前方後円墳として、この古墳群中でもっとも規模が大きいことは認識できた。また、10号墳以外のほかの前方後円墳は消滅か、半壊以上になっており、調査によってもっとも多くの情報を得られる可能性が考えられた。

(3)　調査の経過

第1次調査（2006年度）　まず古墳全体を覆った竹を伐開することからはじめた。その上で、測量調査・地中レーダー探査を実施し、さらに地中レーダー探査の成果を参照してトレンチ設定を行い、発掘調査に至った。トレンチは墳丘裾部に7ヶ所（1～7tr）と墳頂部に設定した。

第2次調査（2007年度）　第1次調査の成果を受けて、西側クビレ部、前方部西側面、墳頂部の3ヶ所の調査を行った。西側クビレ部では、第1次調査で設定した5トレンチ内のサブトレンチで現位置を維持した須恵器の存在を確認していたことから、その周囲を拡げて土器群を面的にとらえられるように新たに調査区（WKtr）を設定した。あわせて墳形をより明確なものにすることも目指した。前方部西側では、第1次調査で埴輪がまとまって出土した地点（3tr）の南側を拡張し、その隣接地に埴輪の続きがないかの確認と墳形確認の目的で調査区（WZtr）を設定した。墳頂部では第1次調査で軽石が数多く確認されていたが、その性格の解明と埋葬施設との関係を確認する目的で面積を拡げ、さらに下層部の調査を目指した。

図５　上空からみた神領古墳群（南から）

図６　平野からみた神領古墳群（北東から）

図７　上空からみた横瀬古墳（西から）

図８　地上からみた横瀬古墳（東から）

第３次調査（2008年度）　第３次調査では後円部墳頂の埋葬施設の調査を重点的な課題とした。第２次調査では乱掘によって破壊された石棺の蓋石を確認し、この古墳の埋葬施設に刳抜式石棺があることまでは明らかになっていた。同時に攪乱土中に鉄製甲冑片や鉄地金銅製品が存在することも判明していた。そのため第２次調査の掘削範囲よりも、さらに下層に石棺の埋まっている可能性を考えて、あらためて調査を実施した。

加えて、墳丘東側のクビレ部（EKtr）と前方部側面（EZtr）、西側の前方部隅角部（WStr）に調査区を設定した。東側クビレ部では墳丘構造と祭祀施設等の有無の確認を目的とした。前方部東側面では地中レーダー探査で地下式横穴墓とみられる反応があった付近に２トレンチを設定していたが、第１次調査では地下式横穴墓が確認できなかったので、その再確認と前方部構造の解明を目的として調査区を設定した。

第４次調査（2010年度）　基本的な調査は第３次までで終えたが、石棺蓋石の実測・写真撮影および墳頂部攪乱坑壁の土層観察補足を行った。

あわせて神領11号墳の測量調査を実施している。

謝辞　調査にあたっては数多くの方々のお世話になった。紙幅の都合もあり、ここですべての方に御礼を申し上げることはできないことをお断りしておきたい。

古墳地権者の龍相重治さん、寺園ヒロ子さん、村岡寅則さん、東條昭夫さん、大崎町教育委員会の内村和憲さんをはじめ、大崎町の方々のご協力なくしては本調査は成り立たなかった。また、除ながら多大な協力をいただいた、新福深さんをはじめとする肝付町教育委員会の方々、くにの松原キャンプ場の堀之内裕行さん、つぼやま鮮魚店の坪山丈郎さんには、とくに感謝の念を捧げたい。

調査にあたっては例言にあげた全国各地の大学考古学研究室からの学生の参加があった。参加学生および研究室関係者の方々に御礼を申し上げたい。

また、調査中、交通の不便なところであるにもかかわらず遠近を問わず多くの方々に足を運びいただき、多大な支援、ご指導をいただいた。今ここでお名前を記すことはできないが、厚くお礼申し上げたい。

3　墳丘

(1)　測量調査（図 9）

第 1 次調査はまず伐開作業後、測量調査から実施した。残存墳丘は全長 34m、後円部径約 17m、前方部幅 7m であり、後円部に比して前方部が細長い形状であったが、各所とも周辺から切り崩された状況が明瞭で本来の形をとどめているとみられる箇所は確認できなかった。

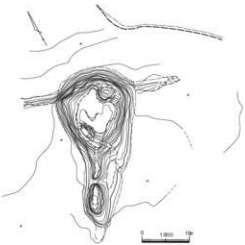


図 9　神領 10 号墳測量図

(2)　地中レーダー探査（図 10）

第 1 次調査で発掘調査に先立って、宮崎県立西都原考古博物館・東憲章氏に地中レーダー探査の実施協力を依頼した。墳丘周辺の平坦部で実施したところ、結果としてこの古墳には 3 基の地下式横穴墓がともない、周囲にも 1 基存在する可能性の高いことがわかった。そこで調査区の設定に当たっては地下式横穴墓の検出が推定される位置を中心に選んだ。

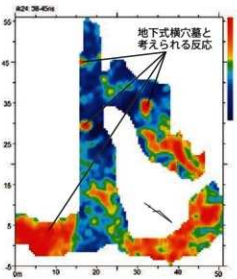


図 10　神領 10 号墳地中レーダー探査

(3)　墳丘調査各説（図 11）

第 1 次から第 3 次調査で古墳の周囲に 11 カ所、墳頂部に 1 カ所、計 12 ヶ所の調査区を設定した。

1 トレンチ　地中レーダー探査で地下式横穴墓の存在する可能性が考えられたため、設定した調査区である。表土掘削の結果、1987 年に調査された神領 5 号地下式横穴墓であることが確認できた。

前方部東側面（2 トレンチ・EZ トレンチ）　地中レーダー探査の成果から地下式横穴墓の存在が予測されたため第 1 次調査で 2 トレンチ、第 3 次調査で EZ トレンチを設定した。結果、墳丘裾部分で土師器壺が出土したが、地下式横穴墓の竪坑は確認できなかった。墳端部の周溝は緩やかな窪みで、明瞭な輪郭をもつ溝にはなっていない。またクビレ部と比べると浅くなっており、周溝は前方部の前端に向かって浅くなり、掘り込みも不明瞭になるものと考えられる。

前方部西側面（3 トレンチ ·WZ トレンチ）　第 1 次調査で設定した 3 トレンチでは周溝底に地下式横穴墓 1 基を確認し（10 号墳 2 号地下式横穴墓）、土師器高杯・杯・小型丸底壺と盾持人埴輪が出土した。土師器は竪坑埋土直上から出土しており、地下式横穴墓の埋め戻し後の墓上祭祀に伴うものと考えられる。盾持人埴輪は地下式横穴墓の竪坑すぐ横に倒れるように破片が散乱しており、土師器よりごくわずか上層に含まれていた。墳丘の裾部近くに樹立されていたものが倒れ込んだとみられる。さらに埴輪等の拡がりを確認するために第 3 次調査で WZ トレンチを設定した。ここでは浅い周溝を検出し、土師器高杯が出土したが、埴輪の拡がりはほとんどみられなかった。

西側クビレ部（5 トレンチ・WK トレンチ）　第 1 次調査の 5 トレンチで原位置にある土器数点を確認したため、面的な調査を行うべく第 2 次調査で WK トレンチを設定した。ここでは周溝底およびその上位に造った小テラス面において土器群を配列した祭祀空間を確認した。その全体像は

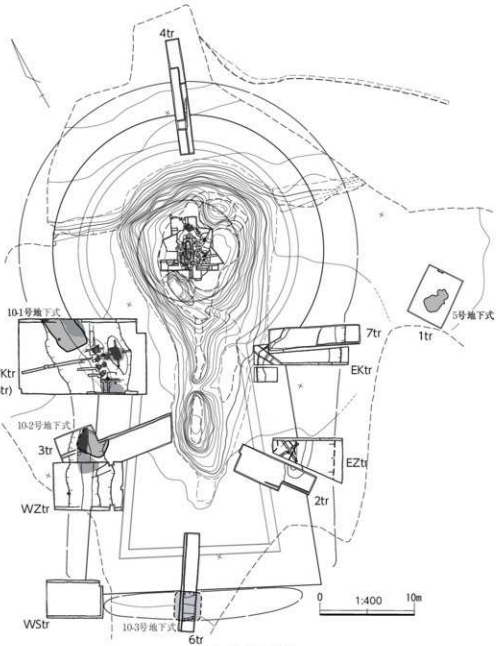


図 11　墳丘平面図

後述する。また周溝内北側で地下式横穴墓の竪坑を確認した（10 号墳 1 号地下式横穴墓）。

東側クビレ部（7 トレンチ・WK トレンチ）　第 1 次調査で 7 トレンチを設定し、第 3 次調査で EK トレンチを設定した。クビレ部の屈曲部墳端には太平洋戦争時の塹壕とみられる掘り込みがあり壊されていたが、埴輪片以外に祭祀などの痕跡・遺物は認められなかった。

前方部前面（6 トレンチ・WS トレンチ）　第 1 次調査で 6 トレンチを設定し、前方部正面中央で浅い周溝を確認したが、第 3 次調査で設定した WS トレンチでは西側前方部隅角と推定される位置で周溝などの遺構は確認できなかった。前方部側面の周溝底は東西ともにクビレ部から前方部前端側に向かって徐々に浅くかつ不明瞭になり、隅角付近では掘り込みをもたないか削平されて消失する程度のものになると考えられる。また、6 トレンチの周溝底には竪坑があり、地下式横穴墓が構築されている（10 号墳 3 号地下式横穴墓）。

後円部（4 トレンチ）　墳丘裾を大きく段状に削り落としており、遺構は確認できなかった。後円部はクビレ部の成果と主体部の位置をもとに復原案を考えている。

4　墳頂部埋葬施設と副葬品

調査経緯　後円部は周囲からの切り崩しによってかなり小さくなっていた。また墳頂には戦時中の壕とみられる大きな攪乱が北東・南西の各１カ所あり、中央部も過去の乱掘で窪んでいた。中世以降、数度の乱掘があったとみられ、残存状態はきわめて不良であった。

調査前の清掃の際、軽石がわずかに散乱し、埋葬施設に軽石を用いた可能性はうかがえた。そこで、第１次調査時から攪乱土の掘り下げを慎重に行ったところ、数多くの軽石が姿を現した。第２次調査でも掘り下げを進め、破壊された石棺蓋石を検出し、さらに第３次調査にいたって全体像を把握するに及んだ。その結果、埋葬施設は刳抜式舟形石棺を軽石で覆った礫槨であることが判明した。また棺外東側には副葬品の配列施設を確認した。

礫槨　調査前からみられた軽石は石棺を覆ったものであった。当初は石室の壁体を構築する部材の可能性を考えたが、石材は積み重ねられてはおらず、土と石とで石棺を覆う構造である。そのうち、棺身を取り囲む石材は大きく四角いものが使われており、加工痕のあるものを含んで丁寧に並べられている。一方で、棺蓋周辺の軽石は、それよりも小さく丸めの石材をやや疎らに積んでいる。棺身と棺蓋を覆うものではその大きさや扱いに差が認められる。

また、北小口の外側にはこれらと様相の異なる拳大くらいの軽石小礫群がある。高い位置に残っており、棺を軽石石材で覆った後、最後に小礫で覆った可能性を考えている。

図 12　主体部検出状況

図 13　主体部完掘 (1)

石棺　棺は刳抜式舟形石棺である。

棺身は長方形の本体に長辺2個ずつ、短辺各1個、計6個の縄掛突起があり、突起を含む最大長は277cm、最大幅128cm、突起を除く本体の長さは242cm、幅97cmを測る。棺身の高さは約40cmで舟形石棺としては扁平であるが棺底部は船底状を呈する。人体を収める棺身内面の刳込み平面形は小判型で、上面での長軸は208cmである。加工痕は面とカーブを取り混ぜて平滑に削り、仕上げがきわめて丁寧である。中央南寄りに方形の排水溝が穿たれている。刳込みの底はほぼ平坦であるが、上面では長軸で南側が、短軸で西側が2～3cm高い。

棺蓋はきわめて扁平であることを特徴とし、両小口および側辺に方形の縄掛突起をもつ。乱掘時の破壊で本来の1/3程度しか形を残していないが、棺身同様に6個の突起をもつと考えられる。南小口棺蓋上には鉄器を載せていた痕跡がある。

石材は入戸火砕流の溶結凝灰岩で、その産出地は志布志市夏井海岸が推定される。また石工技術は延岡産石棺の系譜のものであろう。

図14　主体部完掘 (2)

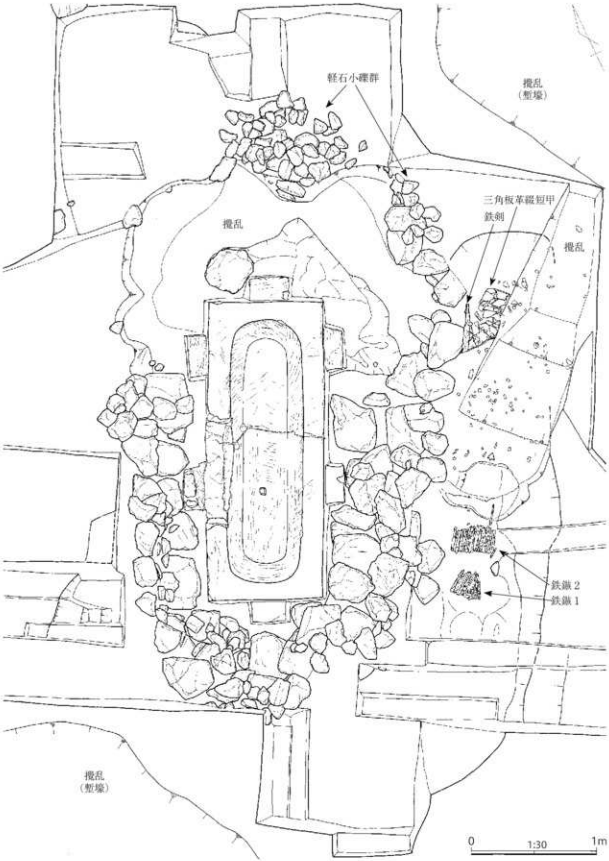


図 15　主体部平面図

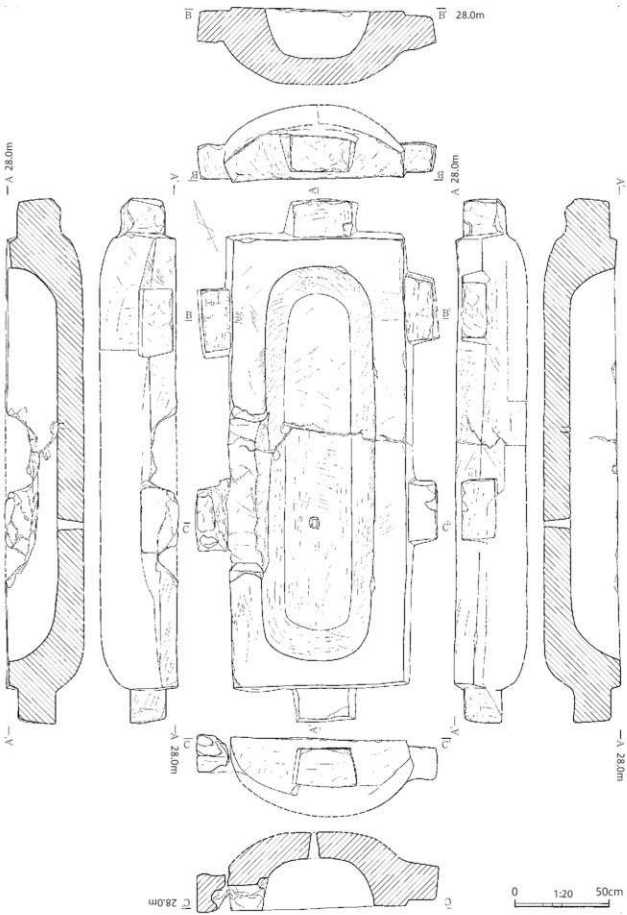


図16　石棺（棺身）図

北小口（外面・内面）

南小口（外面・内面・付着鉄銹細部）

西側（外面・外面・内面）

図 17　石棺（棺蓋）

墓壙と埋葬施設の構築　盛土の観察から埋葬施設の構築には墳丘の造成過程でまず石棺の棺身が収まる程度の深さをもった墓壙を造っていたことが観察できた。この墓壙は前方部側の壁がなく開いていたとみられ、石棺は前方部側から墳丘上に上げて、後円部墳頂の墓壙に引き込んだと考えられる。その上で、棺身を後円部中央に設置し、周囲に四角い軽石石材を配置した後に埋葬、副葬品配置が行われる。そして次に蓋石をのせてから棺蓋上にも副葬品を置き、さらに丸めの軽石石材と土をかぶせ、最後に拳大の軽石小礫群で覆い上部に盛土をする。棺外東側副葬品の配置は被葬者の埋葬時と棺蓋設置後のどちらも可能性があるが、棺外という意味で棺蓋上副葬品の配置と同時であろうか。なお、墓壙壁は棺身の高さ相当部までであり、棺蓋を設置して以降、埋葬施設の埋め戻しは墳丘の造成と一体で行われたと考えられる。

現状で墳頂は相当破壊されているために本来の高さは不明であるが、攪乱土の中から埴輪や土師器片が出土しており、墳頂部でも埴輪配列、土器祭祀が行われたとみてよい。ただし、形象埴輪片は確認していない。

石棺内副葬品　石棺内から碧玉製管玉が4点出土した。また攪乱土中からヒスイ製勾玉が2点出土し、そのうちの1点には刀剣類とみられる鉄片・管玉2点が一緒に銹着している。ほか管玉3点が攪乱土中から出土しており、計9点確認できる。いずれも棺内の被葬者に伴うものであろう。棺内に玉と刀剣類のあったことは確実である。棺身・棺蓋とも内面にはベンガラとみられる赤色顔料を塗っているが、棺内底部付近では朱とみられる顔料がわずかにあった。

棺外副葬品　棺蓋南小口部上には鉄器の一部が銹着している。器種は確定できないが点々と残る

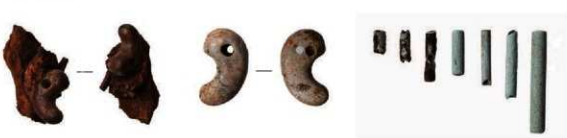


図 18　勾玉・管玉

輪状の銹痕跡から甲冑の可能性が考えられる。

礫槨の東側には、棺外副葬品列が確認された。中央部が大きく攪乱されていたが、それでも両端には鉄剣、鉄製短甲、鉄鏃が現位置で残されていた。また周辺からは小片となって散乱した鉄器が多数出土した。

副葬品列北端の短甲と南端の鉄鏃では出土レベルが異なること、全体に床面が平らでないこと、鉄剣が石棺を覆う軽石石材の上に乗ること、また、鉄鏃のすぐ横にも石材があること、短甲がやや傾斜して置かれていることなどから、副葬品は箱などには収めずに石棺東側に直接並べられたものと考えている。

副葬品列の北端では、攪乱によって鋒側の約1/2程度欠損した鉄剣、全体の約1/3となった三角板革綴短甲が出土した。南端では鉄鏃束が2列出土し、南側の鏃群1は鏃身下部の長身化した圭頭鏃、北側の鏃群2は鏃身部の長い柳葉鏃である。

三角板革綴短甲南側の攪乱坑底付近ではまとまって多段鎧とみられる鉄片が出土した。その他に攪乱土中から、金銅装眉庇付冑、革綴衝角付冑、鋲留短甲、頸甲、肩甲、篠状鉄札片が出土している。鉄鏃では、平根系の短茎鏃が数点と圭頭鏃片が数多く出土しており、棺外副葬品列には、鏃群1·2以外に、平根系鏃群と圭頭鏃の一群があったと推定する。また、胡簶も攪乱坑から出土しており、現位置を保たなかった鏃群（圭頭鏃群）に伴うのであろう。

図19　棺外副葬品出土状況

1. 棺外副葬品列（南から）、2. 棺外副葬品列（西から）、3. 短甲後胴・剣出土状況、4. 短甲前胴出土状況、5. 鉄鏃出土状況

図20　甲冑

1. 三角板革綴短甲、2. 鋲留短甲とみられる破片、3. 頸甲、4. 眉庇付冑および可能性のある破片、5. 革綴衝角付冑、6. 革綴衝角付冑とみられる破片、7. 篠状鉄札の可能性のある破片

図21　胡籙

甲　冑　三角板革綴短甲は一部現位置を留めて出土したが、大きく壊されていた。この短甲は後胴押付板中央に鋲留技法による補修があり、押付板左脇部の結合には小鉄板を介在させて補充している（図20-1）。

また、破片資料の中には鋲留の厚い鉄板があり、鋲留短甲片と考えているが部位の確定が困難である（図20-2）。

冑は革綴衝角付冑と金銅装眉庇付冑の破片が存在する。衝角付冑は衝角部先端があり（図20-5）、また綴間隔が短甲より著しく狭い革綴甲冑片も衝角付冑であろう（図20-6）。眉庇付冑は地板も金銅装とするタイプである（図20-4）。また帰属不明の多段鋲の破片がある。頸甲は現状で2点あり（図20-3）、また肩甲片も数点確認できる。1セットであろう。

そのほか、幅2cm程度の帯板がある（図20-7）。肩甲にしては幅が狭く（最小1.8～最大2.5cm）、残存状態はよくないが篠状鉄札の可能性を考えている。

すなわち、ここでは甲冑は革綴と鋲留の短甲・冑2組、それに頸甲・肩甲、篠状鉄札を伴うものと考えられる。とくに、眉庇付冑が金銅装であることは被葬者の地位の高さを表している。

胡　籙　胡籙片はいずれも攪乱土中からの出土である。可動式の中円部を伴う吊金具が2点分出土している（図21-1･2）。鈒

図22　棺外副葬鉄鏃束
1.鏃群2、2.鏃群1、3.鏃群2の1本、4.鏃群1の1本

具は欠損するが金銅製、本体は鉄地金銅製で銅鋲を用い、周囲には波状列点文を施す。鋲頭の被せは確定できない。内面側には繊維を革ではさみ鋲で固定する。

その他、鉄地金銅製で銀被鋲をもつ帯金具片（図21-3）、鉄地金銅製部と鉄製部をあわせもつ帯板金具（図21-4~6）、鉄製方形四鋲の帯留金具がある（図21-7·8）。方形四鋲金具は短甲の蝶番金具に似るが鋲脚があり、鉄板に結合していないことからそれではなく、また馬具の辻金具の可能性も考えられるが、ほかに馬具と確定できる鉄片がないので消去法的に胡籙に伴うものとみておきたい。

図23　平根系鉄鏃

鉄　鏃　鏃群1の圭頭鏃は樹根で一部攪乱を受けているが28本確認でき、また破片が2本あるので、30本からなる鏃束とみられる。鏃群2は鏃身部の長い柳葉鏃が84本で束を構成している。鏃群1・2ともに鏃身部には各所に革が付着しており、その容器に由来するものと考えられる。

鏃群2の北側攪乱坑端に完形の圭頭鏃が1点あり、また攪乱内から多数の圭頭鏃片が出土していることから、鏃群2の北側にはもう1つの圭頭鏃群があったとみられる。

平根系鉄鏃はすべて攪乱土中から出土しており、重抉腸抉短茎鏃が3点、腸抉透孔短茎鏃が3点、茎部片が1点ある。

すなわち、鏃群1・2に加えてもう一つの圭頭鏃群と平根鏃群があり、計4群の鏃群が存在したと考えられる。

刀剣鉾　三角板革綴短甲の横に置かれた鉄剣は剣身幅が5.2～5.7cm、茎長17.2cmある大型品である（図24-1）。その他に剣身幅が異なる剣破片が2点（図24-3·5）と茎片1点（図24-4）あり、大型の剣とあわせて、剣3点以上の存在が確認できる。ほか、大刀の鋒部（図24-2）、山形抉りの袋部をもつ鉾（図24-6）、鉄製の鍔（図24-7）がある。

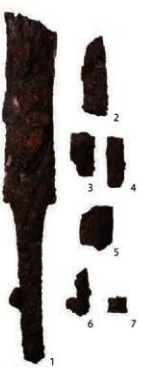


図24　刀剣鉾

5　クビレ部と祭祀土器群

図 25　クビレ部検出状況（1）（南西から）

クビレ部土器群　クビレ部では祭祀空間を構成する土器群が良好な状態で遺存していた。調査地は近年まで畑地としての利用がなされ、大きく削平されて耕作痕も縦横に深く走っていることからみても奇跡的としか言いようがない。

クビレ部では周溝底よりやや上位に小テラスを設けて小型の須恵器と土師器を方形に配置し、その前面に壺を乗せた須恵器器台2セットと台付壺1を立て、周溝底には小テラスを区画するように須恵器甕を中心とした土器を配置していた。小テラスは造り出しと同様の機能をもつと考えられる。なお、朝顔形埴輪は小テラス土器群の上から倒れ込んでおり、そのやや上位に立てられていたと考えられる。土器群は表1の構成となっている。

総計71個体以上、そのうち須恵器が35個体、土師器が36個体以上である。須恵器はTK73～216型式に位置づけられる。古墳出土の初期須恵器数としては大阪府野中古墳に次ぎ、大阪府堂山1号墳を上回り、第2位である。また、現位置を保ったものが多く、配置状況を復元できる状態で遺存していたことは特筆できる。ちなみに大甕底部内面には絞り痕がある。

須恵器甕・壺は底部穿孔を行っている、また中型甕3・大型壺・小型壺は打ち抜かれた側の須恵器片も近くから出土した。中型甕2と大型壺の口縁部は打ち欠きで、台付壺の脚部もその可能性が高い。

表1　クビレ部出土土器一覧

	須恵器		土師器	
小テラス土器群	高杯	15	大型高杯	2
	杯身	2	中型高杯	20
	蓋	2	小型高杯	6
	有蓋高杯蓋	3	杯	8
	把手付椀(大・小)	2	製塩土器（破片）	1
	短頸壺	1	直口壺	1
	台付壺	1	小型丸底壺	1
	筒形器台1＋小型壺1	2	甕	1
	高杯形器台1＋中型壺1	2		
周溝底土器群	大甕	1	大型高杯	1
	中型甕	3	中型高杯	1
	大型壺	1	杯	1
			二重口縁壺	1
現位置を離れ破片となった土師器高杯　2～4				

図26　クビレ部検出状況(2)
1.南から、2.西から、3.北から

図 28　クビレ土器群集合
（撮影：牛嶋　茂）

◀図 27　クビレ部土器群出土状況細部

有蓋高杯蓋 1

有蓋高杯蓋 2

有蓋高杯蓋 3

杯身 1

杯身 2

図 29　クビレ部出土須恵器 (1)

高杯 1

高杯 2

高杯 3

高杯 4

高杯 5

高杯 6

高杯 7

高杯 8

高杯 9

高杯 10

高杯 11

高杯 12

高杯 13

高杯 14

高杯 15

図 30　クビレ部出土須恵器 (2)

甕1

甕2

短頸壺

把手付椀（大）

把手付椀（小）

筒形器台＋小型壺

高杯形器台に伴う中型壺

筒形器台に伴う小型壺

台付壺

高杯形器台＋中型壺

図31　クビレ部出土須恵器 (3)

大甕1

中型甕2

中型甕3

大型壺

中型甕4

図32　クビレ部出土須恵器(4)

図32　クビレ部出土土師器(1)

中型高杯 1

中型高杯 2

中型高杯 3

中型高杯 4

中型高杯 5

中型高杯 6

中型高杯 7

中型高杯 8

中型高杯 9

中型高杯 10

中型高杯 11

中型高杯 12

中型高杯 13

製塩土器

図 33　クビレ部出土土師器 (2)

大型高杯1

大型高杯2

大型高杯3

杯1

杯2

杯3

杯4

杯5

杯6

杯7

杯8

杯9

二重口縁壺

甕

図34　クビレ部出土土師器(3)

6　前方部西側面と盾持人埴輪

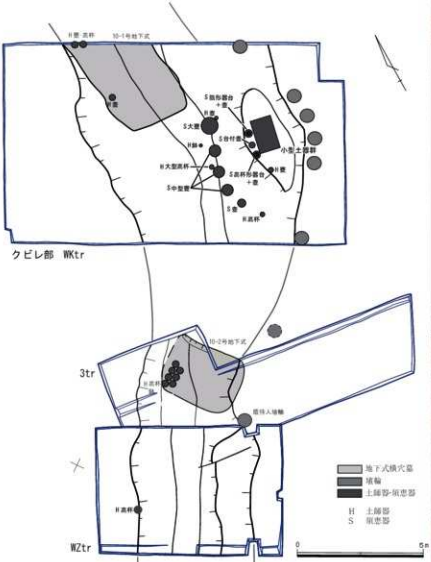


図 35　前方部西側面平面図

埴輪の概要　調査以前に埴輪の存在は知られていなかったが、各トレンチで出土している。西側クビレ部では個体復元可能な資料が出土し、コーナー部では 4 個体分が集中していた。破片の分布から墳丘には 3 ～ 5m と広く間隔を開けて樹立していたと推定される。

形状復元できるものは、朝顔形埴輪・円筒埴輪と盾持人形埴輪である。円筒埴輪はクビレ部で 1 個体が確認されたのみであるのに対して、朝顔形埴輪は 5 個体あり、それ以外でも多くの円筒状の埴輪は朝顔形埴輪の可能性が高く、壺形埴輪の機能を継承するような配置であるとみられる。墳頂・墳端ともにその他の形象埴輪は確認できていない。

朝顔形埴輪、円筒埴輪ともに 3 条 4 段であり、また朝顔形埴輪の肩部を含む底部以外の各段に 4 方向の透孔をもつ。外面は縦ないしナナメの板ナデ調整でハケメはみられない。突帯下には凹線による設定痕が残る。これらの形状、技法は横瀬古墳の埴輪との共通性が高い。

図 36　3 トレンチ遺物出土状況および WZ トレンチ
1 ～ 3.3 トレンチ遺物出土状況、4.WZ トレンチ完掘（北から）

図37　盾持人埴輪全体像

盾持人埴輪　前方部西側面の3トレンチにおいて眉庇付冑を被る人物を表現した盾持人埴輪が出土した。この埴輪の特徴はなんと言ってもそのリアルな表情である。くっきりとした目鼻立ち、眉間や小鼻、頬の膨らみなどの外面の表現みならず、鼻の穴も深く奥でつながり、口内には上下に歯を差し込む溝（歯茎）もある。時期・地域に違いはあるが、群馬県山名原Ⅱ遺跡1号墳出土の盾持人埴輪で白い石を差して歯を表現する例があるので、これと同様に当初は白石を上下に差し込んで歯を表していたのであろう。これほどまでにリアルな表情の埴輪は全国的にも他に類をみない。

顔面部は下向きに出土したため状態は良好であるが、後頭部側は直上までゴボウ耕作トレンチャーによる掘削で破片化しており一部は欠落している。また冑の頂部は管で折れ、受鉢が欠落している。庇部も出土しなかった。顔を立体的に表現するため、顔面部は他よりも非常に分厚く粘土を盛り上げて形成している。また冑の管には芯として竹串のようなものを刺して形づくったことがわかる。冑の文様は非常に細い刃先の工具で刻まれている。

冑のモデルは竪矧板鋲留ないし小札鋲留眉庇付冑である。2条の突帯で3区分されており、上2段が冑地板の表現である。左側面の下段地板には横方向の区画文様が存在するなど、実物を写したような顔面の表現とは異なって埴輪独自の解釈が加えられている。また最下段は鎧の表現であるが、

図 38　盾持人埴輪頭部

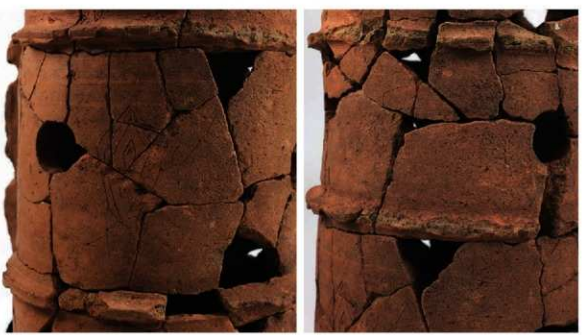


図 39　盾持人埴輪胴部細部線刻

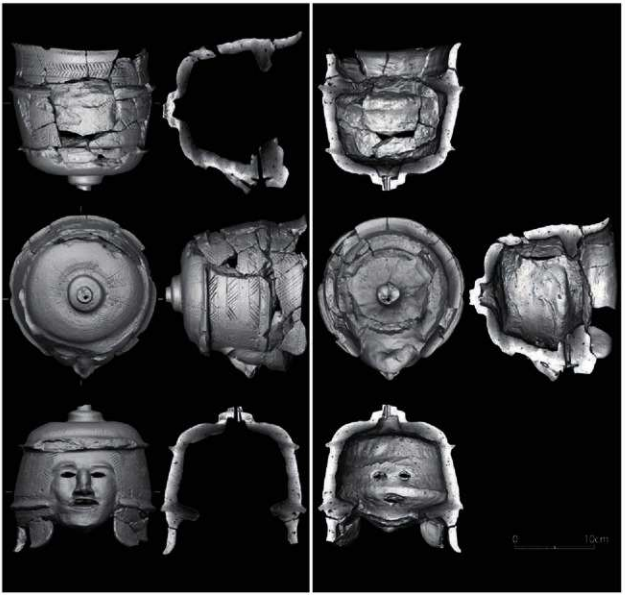


図40　盾持人埴輪Ｘ線CT画像
（撮影：九州国立博物館）

右側から後頭部にかけては横方向の線刻で板鋲を表現するものの、左側面は複合鋸歯状の斜線文を刻んでおり、これも実際の冑とは異なる。この左側鋲部の文様は左下段地板と一連で刻まれたものであろう。全体に、右側面から後頭部は実物の眉庇付冑を観察した知識が反映されており、左側面は独自の文様が刻まれている。左右向かい合って別々の人物が刻んだのであろうか。

胴部は一ヶ所にだけ縦方向のヒレをつけ、菱形文を描いただけのものである。菱形文で盾文様を表現するが、盾の形状は表現せず、顔の精巧さからみると極端に粗略なつくりである。胴部はヒレ以外、朝顔形埴輪に共通していることからそれと同じく本来は３条４段であったと考えられる。そのため墳丘に埋設した基底部から上が折れるようにして周溝底に倒れて残ったものと考えられる。なお透孔は胴部各段および肩部に４箇所あり、ヒレにも２箇所ある。

線刻は胴部の上から第２段目に菱形文が２点刻まれているが、そのうち一方は内部を文様で充填しない菱形の輪郭だけである。また同段にはもう１点四角い線刻があり、上から第１段目には解釈不能な菱形・三角状の線刻がある。

なお、前方部東側の２トレンチからヒレ付の埴輪片が出土しており、西側クビレ部のWKトレンチでは、二重の菱形線刻をもつ胴部片が出土している。それぞれ離れた場所であり、同一個体とは考えられないので、盾持人埴輪が３個体以上存在した可能性も考えられる。

7　地下式横穴墓

神領5号地下式横穴墓　1987年に調査されたものである。全長3.98m、玄室の長さ2.10m・幅1.28m・高さ0.72m、竪坑長1.90m・幅1.55m・深さ1.17mである。イモガイ製貝釧1個体が副葬されていた。今回、1トレンチにおいて、調査後にシラスを充填して埋め戻された状況を検出した。調査当時は10号墳との関係が意識されていなかったが、あらためて10号墳に近在することがあきらかとなった。

10号墳1号地下式横穴墓　クビレ部やや北側の周溝底で竪坑が検出された。竪坑上に土師器高杯・甕・壺底部からなる祭祀土器があった。竪坑は周溝底から外側傾斜面にかけて構築されていることから、玄室は墳丘側ではなく、古墳外側にあると推定される。

図41　地下式横穴墓検出

1.5号地下式横穴墓、2.5号地下式横穴墓図、3.10号墳1号地下式横穴墓、4.10号墳1号地下式横穴墓上面出土土器、5.10号墳2号地下式横穴墓、6.10号墳2号地下式横穴墓上面出土土器、7.10号墳3号地下式横穴墓、8.10号墳3号地下式横穴墓上面出土鉸具

10号墳2号地下式横穴墓　前方部西側面周溝底で竪坑が検出された。竪坑直上に祭祀にともなう高杯3、小型丸底壺3、杯1個体があった。竪坑は周溝底から墳丘側傾斜面にかけて構築されており玄室は墳丘側にあるとみられ、地中レーダー探査の成果とも整合する。

10号墳3号地下式横穴墓　前方部正面中央付近の周溝底で竪坑が検出されている。竪坑上面から一部破損した馬具の鉸具が出土した。墳丘側傾斜面にかかる位置に竪坑があることと地中レーダー探査の成果から墳丘側に玄室が構築されているとみなされる。

その他　2005年に大崎町が発掘調査した神領8号地下式横穴墓も近在しており、また1958年発掘調査の神領1号地下式横穴墓も隣接する畑地であったといわれている。10号墳周辺には古墳に従属するものおよびそれ以外にも多数の地下式横穴墓が密に分布することが確認されている。

8　まとめ

(1)　墳丘

周囲はかなり削平されているが周溝を検出し、墳裾の確認によって墳丘長は約 54 mの前方後円墳であることが推定できた。

大隅地域では唐仁大塚古墳（推定 154 m）、横瀬古墳（140 m）という 2 基の大型古墳のほかには墳丘長約 80m の飯盛山古墳があり、それに次いで 60m 前後の古墳が数基ある。神領 10 号墳は出土遺物から横瀬古墳と同時期の古墳時代中期中葉・ＴＫ 216 型式段階に位置づけられる。飯盛山古墳は中期初頭頃で時期が異なり、中期中葉では神領 10 号墳が横瀬古墳に次ぐ規模となる。その被葬者もこの地域において横瀬古墳被葬者に次ぐ地位にあったと考えてよいだろう。

周溝は前方部正面ではわずかに窪んでいることを確認したが、前方部隅角部付近では掘り込みが確認できなかった。また、クビレ部と比べて前方部側面の周溝は東西いずれも前端側が浅くなっており、掘り込みも緩やかであった。削平を考慮しても、クビレ部から前方部前端に向かって周溝底は浅くなると考えられ、前方部正面付近の区画は不明瞭になるようである。これは東串良町唐仁大塚古墳などでも明瞭に観察できるが、前方部よりも後円部区画を重視した墳丘区画であり、古墳時代前期以来の九州南部地域の前方後円墳に特徴的な「九州南部型」ともいえる構造である（橋本 2012,pp.108-110）。

(2)　古墳に伴う地下式横穴墓

墳丘周溝の窪みを利用して竪坑を構築した地下式横穴墓を 3 基確認した。今回、前方後円墳の解明を優先し、地下式横穴墓の内部調査は行っていないので詳しい検討はできないが、10-1 号・10-2 号地下式横穴墓上部から出土した土器をみてもクビレ部出土土器群との大きな時期差を認めることはできない。10 号墳被葬者に近い人物が大きな時期差を経ずに埋葬されたものとみられる。

一般的な古墳時代中期の地下式横穴墓に伴って竪坑上で祭祀土器が出土することは稀であるが、類例には鹿屋市岡崎 18 号墳 2 号地下式横穴墓がある。大型家形玄室に花崗岩製石棺をもち、鉄剣・鍬鋤先・貝釧といった豊富な副葬品から首長墓と位置づけてよい。神領古墳群では、近在したと推定される神領 1 号地下式横穴墓も大型家形玄室で軽石製石棺をもち、鏡・大刀・イモガイ製貝釧が出土しており、大隅の地下式横穴墓被葬者としては最上位層のとみなされる。神領 10-3 号地下式横穴墓では鈴具の存在から初期馬具の保有が予測され、10 号墳に伴う地下式横穴墓も首長層の墓である可能性は十分考えられる。10 号墳被葬者の近親者などが想定できるだろう。

なお、古墳に伴う地下式横穴墓としては岡崎 18 号墳に伴う地下式横穴墓群と並んで、最古段階に位置づけられるものである。

(3)　舟形石棺

九州では熊本県を中心として阿蘇溶結凝灰岩の舟形石棺が数多く造られたことはよく知られている。また、九州東岸の大分県臼杵地域・宮崎県延岡地域も同様に阿蘇溶結凝灰岩製石棺の製作地である。方形の縄掛け突起や小判形の棺身内面刳り込み、高さがなく扁平な形態など神領 10 号墳と近い特徴をもつ舟形石棺は延岡地域で確認できる。

一方、石材に関しては入戸火砕流の溶結部、すなわち姶良カルデラの噴出物であり、同様の石材は志布志市夏井海岸付近で採取できるものである（図 1、大木・古澤・橋本 2011）。肝属平野周辺域では、この地域最大の唐仁大塚古墳にも大型刳抜式石棺が用いられており、これも型式学的には延岡地域に系譜があることが推定されていた（橋本 2005）。しかし、この地域では刳抜式石棺の技

術をもつ石工集団がいた形跡はないので、これらの石棺は延岡地域の石工が招請され、志布志沿岸の石材で造ったと考えるのが妥当である。神領10号墳において初めて九州東岸の石棺を媒介にした広域交流の具体像が明らかとなった意義は大きい。

なお、神領10号墳から延岡までは海岸沿いで150km以上の距離がある。この石棺を設置するまでには、石工の招請とその製作、船運による古墳近くの港まで運搬、港から標高28m付近の台地上にある墳頂部までの引き上げといった多大な技術・労力・歳月が投じられたとみなされる。

(4) 甲冑

副葬甲冑を復元すると、短甲・冑は2セット、頸甲・肩甲、篠状鉄札1セットである可能性が高い。そのうち、短甲・冑の1セットは三角板革綴短甲と（三角板）革綴衝角付冑、もう1セットは金銅装（竪矧板か小札）鋲留眉庇付冑と（不明）鋲留短甲である。被葬者は一人と想定されるが、革綴甲冑と鋲留甲冑の、2型式の甲冑を保有していることを特徴とする。

また、金銅装眉庇付冑を保有することは特筆できる。ごく一部しか残存しないが、管・小札には確実に鉄地金銅装があり、橋本分類の総金銅装ないし部分金銅装Aとみてよく、眉庇付冑の中でもとくに装飾性の高い一群に属している（橋本2013）。日本列島の首長層の中でもとくに近畿中央政権との関係において高い地位が与えられた人物が想定される。また、この型式の冑は単なる武具ではなく、とくに朝鮮半島情勢に関わってその保有者の地位や身分を表すという性格を有すると考えられるものである（橋本2004）。

(5) 埴輪

この埴輪の意義は年代と九州南部という場所にある。神領10号墳のTK216型式段階は人物表現の埴輪の初現期であり、全国的にも類例がきわめて少ない。同段階ないしそれ以前の人物表現の埴輪は奈良県茅原大塚古墳、大阪府墓山古墳・野中宮山古墳・長原45号墳・百舌鳥梅町窯・百舌鳥高田下遺跡、京都府赤塚古墳、岡山県黒島1号墳、福岡県拝塚古墳・猫迫1号墳、千葉県祇園大塚山古墳・内裏塚古墳出土例などに限られる。さらに、人物表現の埴輪は古墳時代を通じて西日本では数が少なく、分布の上でも稀少例である。

また、神領10号墳では盾持人・朝顔形・円筒埴輪が確認されているが、いずれも窖窯焼成である。肝属平野周辺域において同様の埴輪をもつのは横瀬古墳のみであるから、両古墳への樹立のために短期的に窖窯を構築した埴輪工房が営まれたと考えられる。初期の窖窯技術の大隅地域への導入には他の埴輪生産地からの技術移転を経て達成されたと推測できる。あわせて、神領10号墳と横瀬古墳とでは埴輪の大きさや厚さなどに多少の差はみられるが、基本的な形態規格、ハケ調整を行わずに在地土器と共通する板ナデ調整とすること、各段に四方向の透孔配置といった特徴、ともに円筒部に直接菱形文を描く例の存在などで共通性を有し、同じ技術系譜、同工房で生産されたとみなし得る。古墳の規模や必要な埴輪数などからすれば横瀬古墳造営に伴って埴輪工房が編成されたものと考えられよう。付近の傾斜地を利用した工房の存在が推定される。

盾持人・朝顔形・円筒埴輪の製作、窯業技術、さらに凹線による突帯設定と台形突帯の設置などは在地に伝統のない近畿中央部から発せられた技術情報によるものである。一方、ナデ調整や各段四方向透孔、朝顔形埴輪の肩部透孔といった特徴は、中期的埴輪様式からは逸脱する独自様相である。これらの混交からみると、この横瀬型とでもいうべき埴輪群は埴輪文化を受容しつつも、生産品の規格再現性が緩慢であることから、埴輪生産の指導者たる工人の知識・技量がさほど高くなかったとみなされる。在地土器生産者を統括する親方層が他地域で技術伝習を受けたといったレベルで、埴輪生産を熟知した熟練工人の参加・直接指導はないか、影響は強くないとみてよい。現状で盾持

人か盾形埴輪以外に形象埴輪が確認されないのも、総合的で高度な埴輪に関する知識・技術をもつ工人が不在であったことを示唆している。

さらに、盾持人埴輪について付け加えておくと、肝属平野周辺域で実物の眉庇付冑は神領10号墳でしか出土しておらず、この冑を被ることのできた人物は、ごく限られていたに違いない。盾持人埴輪については武装人物埴輪の中でも、古墳を守護する護衛者を表すものとして一般的に階層的に低い武人の表現とみられている（水野1971、pp.259-260）。たしかに、中期後葉以降の冑ではないものを被り、顔をゆがめた盾持人埴輪には当てはまるが、中期中葉以前の眉庇付冑や衝角付冑を被る埴輪に低位階層の武人を想定することはできない。出現当初は被葬者やその近親者などの首長層が表現されているとの理解が必要である。

(6) 初期須恵器

神領10号墳の須恵器はTK73～216型式に位置づけられ、初期須恵器出土古墳としては大阪府野中古墳に次ぐ全国第2位の数であり、またその良好な出土状態は他に類をみない。

出土した須恵器の高杯、甕、筒形器台、高杯形器台、壺、大甕、中型甕4は形態･技法的な特徴から、いずれも愛媛県伊予市市場南組窯産と判断できるものである。近年、その製品は松山平野を中心に大阪平野から肝属平野周辺域にまで広域流通する実態が明らかになりつつあるが、神領10号墳の須恵器は市場南組窯産の資料のなかでも突出した状態の良さ、数の多さを誇るものである。短頸壺や杯身など、これまで市場南組窯では出土例がないが、その製品の可能性が高い器種を含んでおり、生産地付近で判明している以上の情報を有している。あわせて、高杯形器台は小加耶系陶質土器の系譜にあると朴天秀氏からの教示もあり、市場南組窯の成立にこの地域の渡来工人の参加があることも指摘できる。

なお、同時に出土した台付壺と中型甕2は陶邑窯産須恵器とみられる。ほか、肝付町塚崎31号墳でも市場南組窯産と陶邑窯産とみられる中型甕が共伴している。岡崎18号墳では陶邑産大甕・樽形甕と産地不明の甕があり、横瀬古墳では加耶系陶質土器ないしその系譜の須恵器が出土し、大崎町～東串良町出土と推定される金官加耶系陶質土器の小型器台もある。近くに須恵器生産地がない肝属平野周辺域では、きわめて活発な広域交流によって4箇所以上の産地から初期須恵器がもたらされ、首長層に分配されたことが確認できる（橋本2008）。

(7) 肝属平野周辺域をめぐる広域交流

神領10号墳では土師器も在地系土器とは異なる。その出自は十分わかっていないが、豊前・豊後などの影響ではないかと推測している。その多くは在地の胎土を用いているが、大型高杯3、杯7は宮崎平野産であろう。中型高杯13も他地域産の胎土である。製塩土器は、備讃瀬戸ないし大阪湾岸産からの搬入品で特製の塩の容器として運ばれたものであろう。

土器以外では、神領10号墳の胡簶は新羅製とみなされるものであり、鹿屋市鞍川29号地下式横穴墓でもその一部が出土している。鹿屋市岡崎18号墳1号地下式横穴墓からは新羅ないし加耶製の鉄鋌、初期U字形鍬鋤先・鏃子といった朝鮮半島系鉄製品が出土し、大崎町伝双子塚採集資料に朝鮮半島製鋳造鉄斧が知られ、最近、鹿屋市立小野堀76号地下式横穴墓で百済ないし加耶製の素環頭大刀も確認された。

また、南島産貝製釧が神領1号・5号地下式横穴墓や岡崎18号墳2号地下式横穴墓、肝付町上ノ原9号地下式横穴墓などで出土している。

すなわち、この地域の首長層は古墳時代中期中葉にきわめて多元的な広域交流を行っており、古墳築造の境界領域であるとともに地域間交流の結節点としての大きな役割を担っていたと考えられ

よう。この広域交流を主導したのが横瀬古墳の被葬者を中心に結集した神領10号墳や岡崎18墳などの首長層であったと考えられる。

(8) 横瀬古墳と神領10号墳

神領古墳群に近在する横瀬古墳は平坦地に築造され、全長約140mを測る。周溝および周庭帯、一部に二重周溝をめぐらす典型的な大型古墳で採集須恵器からTK216型式段階と考えられる。墳長は九州第5位の規模であり、同時期併行では九州最大、播磨以西の西日本全体でも岡山県作山古墳に次ぐ規模である。横瀬古墳は相当数にのぼる窖窯焼成の埴輪を樹立していたことが確実であり、またクビレ部付近の周溝から陶質土器系土器が出土している。埋葬施設や副葬品は不明であるが、明治時代に盗掘され、竪穴式石室から甲や剣などが出土したと伝えている。

神領古墳群と横瀬古墳は1.5kmしか離れておらず、互いに最も近い古墳群である。しかも、神領10号墳は横瀬古墳と同時期であり、埴輪は同一工房から供給されたと考えられる。この同時代に生きた両古墳被葬者は生前きわめて近しい関係にあったことは間違いない。中期古墳の中でも質の高い神領10号墳の副葬品や土器群は横瀬古墳との強い関係の上で入手されたものであろう。また、単独の大型墳である横瀬古墳は本来、神領古墳群に出自をもつ可能性も想定できるだろう。

(9) 神領10号墳の発掘調査成果の評価

神領10号墳の調査目的は、南限域の前方後円墳の実態をはじめて発掘調査で明らかにすることにあった。「まずは古墳の規模と形を調べる。どんな古墳かわからんけど、何も出んでも文句言うなよ。とりあえず古墳の時期は知りたいのでなんか土器くらいは出て欲しいなぁ」と当時鹿児島大学大学院生だった甲斐康夫君に言った覚えがある。これが2006年夏、神領10号墳発掘調査前の私の心境であった。計画当初、別の前方後円墳の調査を考えていたものの、調整が不調に終わったためにその次の候補として調査対象にしたという事情もあって、本書に著したような成果が得られるとはまったく想像していなかった。第1次調査の伐開時に墳丘ではじめて埴輪片を見つけた時には、「なんで横瀬の埴輪がここに落ちてるんだ」と言ったほどである。

結果として、墳丘形態・規模、地下式横穴墓の従属、埴輪、初期須恵器を含む良好な土器群、刳抜式舟形石棺を中心とする主体部、武器武具を中心とする各種副葬品といった実態が明らかになり当初の目的以上の成果を得ることができた。これら、いずれの資料も多くの情報を有し、この古墳が古墳時代中期の典型的な首長墳であり、全国的にみても屈指の内容をもつ古墳であることを教えてくれる。今後、古墳時代中期の地域社会、古墳築造境界領域の形成過程といった古墳時代史論にかかわる問題を考察する上でも標識的な存在になると確信している。

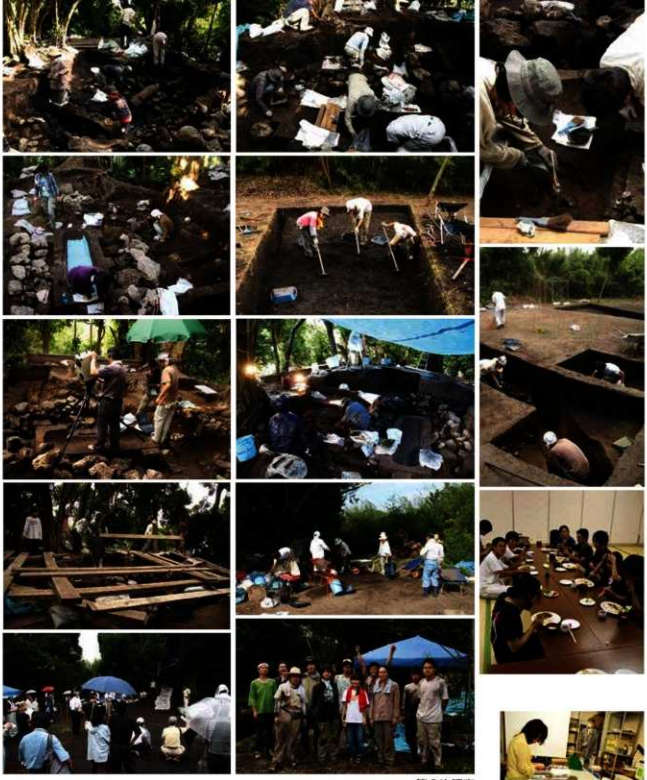
今回はまず2006年から実施した発掘調査の全体像の提示を目的とした。今後、主体部、クビレ部など各地点の調査成果を順次報告する予定であることを記し、本書を締めくくりたい。

【引用文献】
大木公彦・古澤明・橋本達也　2011「大隅半島の神領10号墳石棺の岩石学的考察」『鹿児島大学理学部紀要』第44号　pp.9-13p
橋本達也　2004「眉庇付冑の分布とその背景－古墳時代中期後半の政権と地域－」『西南四国－九州間の交流に関する考古学的研究』愛媛大学法文学部　pp.211-222p
橋本達也　2008「岡崎18号墳出土の須恵器の型式学的位置とその意義」『大隅中良 岡崎古墳群の研究』鹿児島大学総合研究博物館　pp.225-232
橋本達也　2005「唐仁大塚古墳考」『鹿児島考古』第40号　鹿児島県考古学会　pp.76-91
橋本達也　2012「九州南部」『古墳時代の考古学2　古墳出現と展開の地域相』同成社　pp.107-117
橋本達也　2013「祇園大塚山古墳の金銅装眉庇付冑と古墳時代中期の社会」『祇園大塚山古墳と5世紀という時代』六一書房　pp.57-83p
水野正好　1971「埴輪芸能論」『古代の日本』第2巻風土と生活　角川書店　pp.255-278

付　調査風景

第１次調査

第２次調査



第 3 次調查

整理作業

STUDIES ON THE OSUMI OSAKI JINRYO TUMULUS No.10 - I

The Kagoshima University Museum

大隅大崎　神領 10 号墳の研究　I

2016 年 3 月 3 日

鹿児島大学総合研究博物館
890-0065 鹿児島市郡元 1-21-30